

俳人成田千空研究会

千空研究

第12号

晩春

—千空句版画—

藤田 健次

千空さん、21歳の時の方言詩である。「がららド窓開けたキャ」なんて、いかにも津軽衆の言葉遣いがうれしい。千空さんは、その前年、肺結核で東京の会社を辞め、無念の帰郷をしていた。帰郷後は、俳句と出会い、方言詩と共に盛んに投稿していたようだが、青春真っただ中の数年間を、療養生活せざるを得なかった千空さん。その一日一日は、何を食べ、何を眺め、その心は、どんな夢、どんな不安を抱いていたのか。東奥日報社『月刊東奥』昭和17年5月号より。
(版画家・会員／八戸市)



目次

晩春 —千空句版画— 藤田 健次

没後10年、おもな出来事 2

〈回想の成田千空〉

千空先生のお褒めの言葉は 高井まさ江

土曜えっせー 山内ひろ子

〈千空点描〉贈られた句集の山 4

〈作品鑑賞を読む〉⑪

雪よりも白き骨これおばあさん 黒田 杏子

永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々⑪ 齋藤 美穂

五所川原俳句会 最終回 6

千空資料研究④ 新資料カセットテープ

「千空自句自解」より〈上〉 西谷ともえ

〈成田千空資料再録〉⑪ 10

読売新聞コラム／家／第1回萬緑賞

『陸奥野辺地社中 芭蕉翁二百回追善供養』顛末記

会員名簿・北極星 16

千空研究会の事業

① 詳細な年譜の作成

② 千空俳句データベースの作成

③ 関係資料の収集

④ 関係者からの聞き取り

⑤ 会報『千空研究』の発行

⑥ 『評伝 成田千空』の刊行

成田千空没後10年記念号

千空 没後10年 おもな出来事

2009年（没後2年）

10月20日 『俳句は遊びの文学』（角川学芸出版）刊

2011年（没後4年）

7月20日 『脚注 成田千空句集』（萬緑会編）刊

2014年（没後7年）

10月11日～11月24日 青森県近代文学館で企画展

「成田千空」開催

12月 俳人 成田千空研究会発足

2015年（没後8年）

2月15日 『千空研究』第1号発行（季刊）

7月1日 市子夫人から資料約1000点が千空

研究会に寄託される

9月30日 『中村草田男訪問記』（成田千空）刊

10月10日 東奥叢書『成田千空 句集』刊

2016年（没後9年）

8月1日 『千空句帖』影印版（文学で青森を応援する会編）刊

2017年（没後10年）

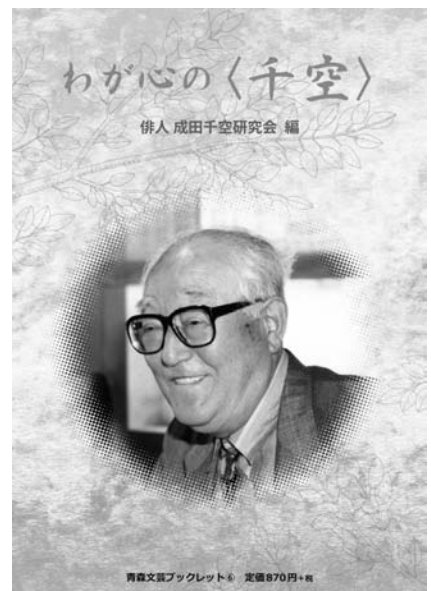
5月17日 東奥日報「没後10年、千空この1句」（随時掲載）始まる

5月21日 千空没後10年記念イベントが県近代文学館で開かれ、研究会員2名が講話

10月20日 陸奥新報「成田千空と五所川原」連載始まる

10月27日～11月12日 五所川原市立図書館でパネル展「成田千空」開催

11月17日 『わが心の〈千空〉』（千空研究会編）刊



『わが心の〈千空〉』 俳人 成田千空研究会編

本紙「回想の成田千空」が本になりました。千空を知る人々の証言を千空研究の資料として残します。

執筆者（五十音順）浅利康衛、阿保子星、泉風信子、兼平一子、上條勝芳、木村武彦、草野力丸、柳引麗子、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、佐々木とみ子、佐藤繁、佐藤陽子、清水雪江、世良啓、高橋睦子、田中和宏、中村雅之、野沢省悟、浜田しげる、藤田健次、矢須恵由。

青森文芸ブックレット 発行 青森文芸出版
定価 940円（税込み）

東奥日報「没後10年 成田千空この1句」

（第11号から続く）

8/24 負けたりと思ふや代田泥深く 富士光生

（原句は「敗けたり」と表記）

9/13 八月の海平らに我ら会ふ 黒田杏子

11/6 滾々と雪ふる夜空紅きぞす 野沢省悟

五所川原市立図書館 パネル展「成田千空」

藤田健次「千空句版画」も展示

五所川原市立図書館では開館40周年記念として没後10年をしのぶパネル展「成田千空」を開催した。会期は10月27日から11月12日まで。

県近代文学館および成田千空研究会後援。11月3日午後1時から、齋藤美穂当研究会調査員の解説がした

図書館ロビーに県近代文学館から借りたパネルを中心に千空句集や関連図書、関係図書、色紙等が展示され、来館者が足を止めて見ていた。特に当「千空研究」のバックナンバーや藤田健次氏の千空句版画6点（本紙「千空研究」の表紙作品）も出品された。

版画は、「あつ、藤田さんの版画だ」と画風を知っている人もいて好評だった。

千空を語る齋藤さん



パネル展「成田千空」会場

『陸奥新報』 新企画 連載始まる

「永住の地・五所川原の千空さん」



千空没後10年の新企画、陸奥新報の連載が始まった。五所川原市を永住の地とした千空の文化活動や、千空を支えた人々との交流を8回にわたって描く予定。執筆は齋藤美穂さん。

県外生まれの齋藤さんは、

県近代文学館の解説員として、3年前に企画展「成田千空」に関わった。調査の過程で興味を惹かれ、文学館の解説員を退職してからは当研究会の調査研究員として、資料の調査や関係者への聞き取りを続けている。

そのなかで見えてきたのは、千空は書店経営の生活者として生きるかたわら、地域の俳句会や文化活動に深く関わってきたという事実であった。

「俳句会の仲間や短歌や絵画など芸術仲間との活動町の人々との付き合いを通して、五所川原での等身大の千空を描きたい」と、齋藤さんは語る。

中央における千空の活動は、『萬緑』のほか、多く俳句雑誌などで明らかにされているが、今回はこれまであまり知られていない五所川原の千空と、それをと

りまく人々の関係にスポットが当てられている。

(上写真は第1回の紙面)



俳人の愛した風景に 成田千空【五能線】

— 角川『俳句』5月号 —

この号は『季題別 中村草田男全句』刊行記念の特集で、グラビアに「中村草田男写真館」があり、続いて、千空の「岩群の生きて波挙ぐ五月かな千空」の句が見開きで紹介されている。

解説文の音羽紅子さんは、北海道北見市で『ゆきしずく』を主宰する俳人で、師系は『童子』の辻桃子さん。

回想の成田千空

千空先生のお褒めの言葉は

高井まさ江

私の萬緑入会は平成元年なので、成田千空先生が萬緑選者であられた期間中、ずっと選をしていただいたことになる。

また、平成十年頃から毎月東京の萬緑句会に出席するようになり、先生は殆ど隔月出席されていたので、句会での選もいただいたのだが、これがなかなか厳しかった。先生の、風土に根差した力強く、大らかな句に憧れていたが、私の句は根無し草のようにふらふらとしていて、選に入るのは難しかった。

全国大会、そして同人になってからは同人会にも参加していたので、お目にかかる機会は比較的多くあり、平成十五年には茨城での全国大会にもお出かけたいただいたのだが、ご挨拶が精いっぱいだった。ゆっくりとそして一歩進めて俳句のお話を伺うことができなかったのは本当に残念である。

平成十八、十九年度に特別作品係となり、十八年度に応募した私の作品「湖岸」は、同人の部の特選第一位をいただいた。十九年一月の萬緑句会後の新年会で先生のお隣の席になり、千空先生からお褒めの言葉をいただいたのだが、それは「高井さん、事務能力は抜群ですね」ということだった。特別作品受付係としての事務能力を評価して下さったのだった。受け付けた作品をコピーして

第一部、第二部毎に選者に送る。時には電話やファックスでのやりとりもあって、「成田書店」と刻字されたファックスを受けたことも思い出す。何が抜群だったのかわからないが、私にとっては宝物の一言で、今も事務方をする時の自信に繋がっている。

この上は「俳句は抜群ですね」というお言葉がいただける様にと考えたが、翌十九年の特別作品選考会にはご出席が叶わなかった。ここに来て俳句の評価を伺いたいところだが、「まだまだですね」というお声が聞こえて来るようである。

(たかい まさえ／森の座 同人／日立市)

土曜えっせー

山内ひろ子

平成五年一月、東奥日報に、五所川原市の対馬暉子さんという方が句集を出されたという記事が載りました。抄出されていたのは、俳句を知らない私にも頷ける俳句でした。

その句集を読みたいと、仕事帰りに寄った本屋では「ウチには無いです。でも新町の成田さんになら有るかも。」と増田病院の向いの本屋を教えられました。

入って注文すると、奥様に「どうして、この句集を？」と聞かれ、「今日の新聞を読んで……。」と答え、始めての句集『文字摺草』を手にししました。

それから二ヶ月後、東奥日報夕刊に、葉書大のスペースの「土曜えっせー」という欄が出来て、

【千空点描】

贈られた句集の山

千空さんに届く句集は多い。急ぐものを除いて、封を切らないまま山積みになっていた。行くたびに増えているので、見かねて言ったことがある。

「礼状を印刷してくるから、取りあえず受け取ったと出しておいたら」。

千空さんはむきになって言った。

「みんな、私に見てもらいたいと思って送ってくるんだよ。今はむりでも、いつか批評を書いて送りたいんだよ」。

見えるところに置いておくのはそういうわけだったんだと、不明を恥じた。

遺された句集には、句を書き写したわら半紙が挟まれていた。千空さんは素読みではなく、一句ずつ書き写すことによって、熟読吟味していたのであった。

〈佐〉

隔週、土曜日に掲載されました。最後の行に（五所川原市 俳人 成田千空）とありました。

私の周囲でも見聞きするような事や、全く知らない事など、平明な文章で綴られていて、毎回楽しみでした。

「土曜えっせー」は、「桜」「白木蓮」等、回を重ねて平成五年十月二日は次のように文章でした。

「一粒の米」

八月二十一日のこの蘭に、私は「走り穂」とい

うエッセーを書いて、「間もなく走り穂が現れ、しゃく熱の太陽が現れるのを期待しよう」と結んだ。それから間もなく近所の田に初穂が現れ、稲の花も咲いてほっとしたが、晴天の日が長続きしないまま不稔(ねん)の穂が見えはじめ、それがしだいに広がって、あきらかに凶作の田と化してしまった。この田の人の話では皆無作に近いという。県内各地の俳句仲間に見ると南部地方が最もひどく、津軽地方でも西郡で平年作に近い田が見られるほかは、良い所で三分作か四分作程度。そのほかは皆無作に近いようである。さらに東北各地の仲間に見ると、秋田、山形、福島で五分作から六分作程度。宮城、岩手で三分作から皆無作ということで、あきたこまちもつがるおとめもひとめぼれもササニシキもむつほまれも黄金色の秋を迎えることができないまま、風に吹かれているさまが想像された。

津軽では元和元年(一六一五)の大凶作以来、昭和十五年(一九四〇)までの三百三十年間に約六十回の凶作が記録されているという。戦争中は戦地に大量の米が送られて、国内では米不足が慢性的となり、戦後は少ない配給米のたしにヤミ米が横行した。この時代に生きた人たちは子どものころから米の貴さを教えられ、殊にじいさんばあさんからは一粒の米でも大切にするように諭されてきた。その背景には凶作の歴史があり、米を粗末にするとバチが当たるというのであった。

一昨日、東京からの帰りに新幹線で大曲の農夫と席を隣り合わせて、車窓に展開する東北の田を眺めながら話し合ってきた。ササニシキはおおかたいもち病にやられているとか、作柄の差についていろいろ教えてくれた。そして東北は米を守ら

ないといけないという。また西郡の農夫Sさんの話では、今年のような冷害の年でも篤農家の田はおおかた平年作に近いという。土の力が違うというのである。

新米のその一粒の力かな 虚子

(五所川原市 俳人 成田千空)

その頃は、私も今まで買っていた米屋から「在庫がない。入荷予定は未定。他を当たってください」と言われ、スーパーの売り場には、売り切れの札が貼られている状態で困ってしまいました。

そんな折、独り離れて住む母に、東北の不作のニュースを心配した富山の知り合いから米が送られて来、その大部分を譲ってくれたり、弘前に住む妹が米屋さんに頼んで分けて貰ったり等、今更乍ら、身につまされて、「一粒の米」を読んだことでした。

翌年春、市のカルチャー講座に「俳句 成田千空」とあり、ともかくにも、どんな方か知れた

【作品鑑賞を読む】⑩

雪よりも白き骨これおばあさん 千空

成田千空氏の作品世界は、八十年代に入って大きく変貌している。ともかく愉しい。面白くて、いきいき澁刺、読ませる句がぎっしり並んでいる。

この第六句集には四〇七句が収められている。毎月八回のカルチャー講座を重ねてこられた歲月の中で、氏はおおむね七十代の初心者である受講生に「自由な発想と確かな表現」に向って進むことを求め、慈愛に満ちた指導を重ねられた。その「行」の実りが誰よりもまず成田千空講師にもた

くて申し込みました。

大粒の雨降る青田母の故郷

を、講座初回に自註自解なさり、何があっても、戦争はいけないと力説なさいました、たった十七文字の俳句、けれどその大きさ、深さに驚きました。そして、千空先生はご近所にお住まいで、市の広報紙をお渡しした事があり、句集を買った店の方でもあったのです。

散逸の切り抜き「土曜えっせー」をもう一度読もうと新聞社にお願いして全三十二回分を送って貰いました。

その事を千空先生に話しますと、「ほう。何、書いてあった？」と聞かれました。お見せすると「まあ、読めるな」と一言。平成十九年、桜どきでした。

数ヶ月後、十一月十七日、岩木山が美しく見える小春日和を逝ってしまった。

(やまうち ひろこ／「森の座」会員／五所川原市)

らされたことをこの句集に如実に示す。調べとりズムが心地よく、切れが効いていて人間味があふれている。掲句は「義母逝く」とある句群の一句。感動的である。

吞めて呑む酒ありがたや盆の家

我は沼妻は湖夏ふかき

波あれば波も春に年忘れ

若き日、師草田男より第一回萬緑賞を贈られた成田千空の詩魂はいよいよ深く鮮らしく、自在に飛翔している。ゆたかな大衆性と芸術性を兼ね備えた充実の句境に学んでゆきたい。(黒田杏子)

『俳句』2007年7月号 句集『十方吟』

―永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(II)―

五所川原俳句会 最終回

齋藤 美穂

千空直筆句集の謎

雑誌『俳句研究』の好企画「わたしの昭和俳句」(平成十三年七月十二月号)の中で五所川原俳句会の発足に触れた千空さんは、「これまでに、私を含めて十七人の句集が出版され、私は「人と作品」について、すべての句集に執筆しました」と述べ、十六名の仲間の名前を列挙しました。

千空さんは生涯多くの句集作りに携わりましたが、設立当初からともに歩んだ地元俳句会の個人句集には特別な感慨を持っていたことがわかります。「句集は句会の収穫であり重石であるのみならず、地方の文化遺産である」という信念のもと、十年、二十年あるいは一生に一度となる会員の句集のために、編集や序文、解説「人と作品」の執筆など力を尽くしました。

平成二十六年、青森県近代文学館で開催された企画展「成田千空」で、地域文化の結実とも言えるこれら十四冊を展示したいと考えた私は、図書館には所蔵されていない「私家版」を求めて遺族のもとを訪ねました。

その中の一冊、『對馬鳴月句集』の作者・對馬鳴月(本名・藤重)は千空さんが五所川原で出会った俳句仲間のうち最も俳歴の長い人物でした。明治三十六年に五所川原町で生まれ、幼年時より

父・春丸(本名・藤吉)らの回覧句会「北星会」を手伝い句作を始めています。大正年代に子規門の内藤鳴雪に師事し雅号を授かり、生涯の心の師としました。大正九年、北郡沖飯詰小学校に勤務以来、北郡・西郡の小学校を転勤する傍ら、木村九折主宰「山葵」、杉野美友主宰「外海」、高松玉麗主宰「寂光」に参加しました。玉麗の偉業である『青森県句集』の創刊号(昭和五年)には千空さんの義兄・岡田晴秋らと名を連ねています。妻・暉子は句会で紅一点の時代を経て、後に五所川原の女性俳句会を結成しました。訪問先で私は鳴月の貴重な句集と五所川原の昭和初期の俳句物語を伺うことになりました。当時、俳句という文芸が異郷の地で、戦地で、病床で、身命と向き合う人々とともにあったこと、私の身近な人々がそうした時代を経て俳句を作り続けていたことに驚き、感銘を受けました。それらを知らなければ、戦後に結成された五所川原俳句会と成田千空のつながり、その後の功績についても瑣末な理解にとどまったことでしょう。

さて、四十五年に発行された『對馬鳴月句集』(非売品)は千空さんが編集に携わり、選句した百句を清書した唯一無二の句集です。一句一句毛筆で丁寧に認められ和綴じに製本された句集は他のどの句集とも様子が違います。この一冊は千空さんにとって何か特別なものだとは思いましたが、遺族は「うちの母が千空先生に頼み込んだのでしよう」と笑うばかりです。

アルバムを見せていただくと、鳴月が若き日に仲間と句碑を建てた写真が現れました。遺品を収めた箱に未開封の手拭いがあり、広げてみるとどうやら石に刻んだ二人の俳句が染め抜かれている

ようです。一体何のために句碑を建て、手拭いを誂えることになったのか首をかしげるばかりでした。その時は鳴月の俳歴、句碑、句集染筆の経緯などには考察が及ばないまま、貴重な句集は文学館のガラスケースに展示されました。

小さな句碑

その後成田千空研究会が設立され、日記調査をする中で私の目はあるページに釘付けになりました。五十二年八月十日の日記に記された散文「小さな句碑」は、地域紙へ掲載する随筆の下書きのようでした。

津軽半島の権現岬の頂上に小さな句碑があるという話は大分前から聞いていた。

去年の夏、俳句仲間の一人が権現岬の頂上へ登って、偶然、その石に出会ったのである。ただの石だと思っただけよく見たら俳句が刻まれてあった。「大島に雲起りけり夏の昼」。誰の句だろう。地面に頭をこすりつけるようにして見ると、どうやら「鳴月」と読めた。あ、對馬鳴月だ。大正十三年七月とある。まちがいない。

鳴月は先年亡くなった五所川原の俳人である。その夫人が對馬暉子でみんな私たちの仲間である。暉子はこの八月の地藏盆の日に、老いの身もかえりみず、権現岬の頂上へ向った。私はその話を本人から聞いた。とてもけわしい道で、途中、灰色の蛇を踏んで驚いたという。ゴンゲンオトギリ草は花の盛りを過ぎて青々と繁っている。今まで見たことがない夫の若き日の句碑が其処にあった。大正十三年といえは鳴月二十才の時である。二尺ほどの石に友と二人で句

を刻み、頂上の尾崎神社に奉納したのであろう。「鳴月は本当に俳句が好きであったことがわかった」と暉子は言う。私は鳴月に寄せる暉子の心を美しいと思う（抜粋）。

四十四年に六十六歳で病没した鳴月は五所川原俳句会に時折姿を見せましたが、会員ではありません。「五所川原の俳人はみんな私たちの仲間である。」と綴られた日記を読んだ私は、（鳴月の勤勉実直な人柄を敬い、俳句とともに歩んだ長い道のりを世に残すため、当然のこととして千空さんは筆を取ったのだ）と感じました。和綴じの私家版は限定数で発行されましたが、大先達への敬意を込めて編まれた特別な遺句集は大切に扱われ、受贈者の遺族から思いがけなく私の手元に巡ってきました。信念のある仕事はこのようなして後世に遺されていくのだと思います。

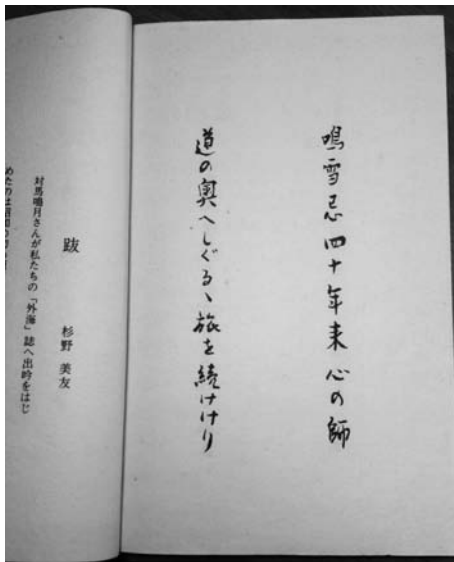
日記には千空さんの憂慮が綴られていました。

「五月二十七日、現代俳句協会へ退会届を書く。」「旅行をして来ると、生活のすべてを反省させられる。」「不況どん底。返品作業。家賃値上げ。」「今年から県下俳句大会を市民俳句会へ。社交化した俳句大会の空気をすこしはあらためる必要がある。」「九月二日、東奥日報大会の宿題句を考えるが、何ともそらぞらしい。句稿を送るかいつも迷う。しかし句を出して会を盛んにするのが出席者のすじ。」「十月十七日、松尾芭蕉祭全国大会の選句（千三百句）佳句少なく、大会目当ての千三百句に徒労感。」

前年出版された第一句集『地霊』を増刷する余裕はなく、一方で地域の文化活動や県外の俳句活

動のために自身の句作の時間は削られていました。さすがに徒労感を味わう日もありましたが、旅先で英気を養い反省もしています。

そこへ飛び込んできたのが「鳴月の妻の武勇伝」でした。俳句を愛し、人知れず仲間と石碑を建てた若き日の鳴月とそれを確かめてきた暉子の行為。それは、「俳句が自分にとってなくてはならない文芸である」という純粹な気持ちを再認識させる出来事であったにちがいません。この



『対馬鳴月句集』千空直筆の巻末句

街に俳句会を設立して四半世紀が経っていました。千空さんは懐かしさと喜びの中で原稿を書いたのではないのでしょうか。

五所川原にもたらされた功績

戦後まもなく五所川原俳句会に参集した顔ぶれは戦前からの俳歴を持つ者、戦後日本の門出を期して新興俳句に共鳴した者、職場俳句会をきっかけに本格的に学び始めた者など多様で、実生活では戦後の復興から経済の成長期へと発展めざましい時代を懸命に生きる人々でした。

千空さんもまた書店経営と結婚生活が始まり、厳しい現実に向き合っていました。句会の在り方を定め、時代の方向性と日々の暮らしに共感し合う仲間たちと歩んだ五所川原俳句会には「階級社会とは打って違って温かい人間味溢れる俳句仲間」だったと会員が懐旧するような連帯感が育まれていました。句会や作品について家族にはほとんど語られていない男所帯の俳句会は取材者泣かせですが、一時代の風景として遺された句集とともに語り継ぎたいものです。

昭和三十四年、俳句結社「萬緑」の全国大会が京都で開催された折に、千空さんは他のどんな名跡よりも感動的な情景を目にしました。〈路傍に大小様々な自然石の句碑が十数基車座に据って、一本の古松が聳えている。〉それは、古の名もない俳人たちの墓地でした。千空さんは「そこに俳諧連衆の在り様を見、歴史を見た」と同時に、本州最北の小さな町で生きる我が俳句会の仲間の姿を重ねたに違いありません。

千空さんには会員とともに「その人間の特質が生かされた俳句」を模索し、本格的な俳句を求め

て積み重ねたもののへの自負もありました。機が熟した会員から順に作られた句集は見たところ統一感もない、まさに「小さきまざまな自然石の句碑」と見るができます。

戦後の復興に向かう街に誕生した五所川原俳句会の活動と隆盛。その歴史はひとつの時代を背景にした人々の歴史でもあります。千空さんには「俳句を探究する強い意志」と「地域文化を遠望する視野」がありました。全国的に存在感を増しながらも地に足をつけて活動し続けた実践者の存在は、文化不毛の地と言われたこの地域の新たな道しるべとなったのです。

(千空研究会調査研究員／五所川原市)

千空資料研究④

新資料 カセットテープ

「千空自句自解」

平成16年6月 於成田書店より(上)

西 谷 ともえ

今年五月、トークイベント「没後10年成田千空を語る」に際に、出席くださった山田邦照氏より一本のカセットテープを託された。山田氏は深浦町にある「太宰の宿 ふかうら文学館」の開館に携わり、オープン時には館長をお勤めになった。ふかうら文学館には開館時から千空さんが常設展示されている。テープは、山田氏が開館準備のために千空さんを訪ね、打ち合わせの様子を録音したものである。テープによると、一生懸命句の解説をしているのだが、最終的には、市子夫人の提

案により、文学館の解説用には改めて「字句自解」として書き付けたものを用意することとなった。45分ほどの録音のうち、30分ほどに展示予定の句に對しての解説があり、その後、残りの10分ほどはパンフレットや入場券、紹介ビデオに使う写真を選んでいく様子である。

今回は句の解説の部分をご紹介します。ところどころ聞き手の山田氏や市子夫人の言葉が織り交ぜられているが、今回はできるだけ省略させていただきます。千空さんの自句解説の部分のみ抜き出した。また、標準語に単純に置き換えにくい語はできるだけ津軽弁の千空さんの言葉を再現しようと試みた。句の表記は発表後に変更していることもあるが、句集掲載時の表記とした。

翻字部分に先立って、山田氏と相談している様子が1・2分録音されており、それによると、展示句は深浦で作った句や、深浦を詠んだ句を入れたいという館の要望に応えようと句集に掲載していない句も含めて二百句の中から選びたいということ、深浦に関係はないが自分の代表句を含めたいという希望が話されており、展示句はまだ決定していなかったようである。

カセットテープ「千空自句自解 平成16年6月 於成田書店」(語り手 成田千空・成田市子、聞き手 山田邦照)

「大粒の雨降る青田母の故郷」っていうのは昭和23年、いや22年に作って23年発表ですね。萬緑に載せて初めて草田男に褒められた句です。

青森空襲の後にこっちに來て五年間帰農した、百姓やったわけです。母の実家に居候しながら開墾の仕事と田畑を手伝った。田んぼの仕事して

帰って來た時に、大粒の雨、にわか雨が降って來た。パーっとね。そしたら周辺の青田がざわめいたんですよ。前にね、青森空襲で受けた戦争のあの悲惨な地獄があるわけですよ。空襲の地獄っていうものはすさまじい地獄なんで、まさにもう地獄そのもの。それを目にしてしまった。絶望的な感じがしてしまいうくらいに。そんなことがあったんですよね。20代のはじめに。そのあとですね、この「大粒の雨」ができた時に、この、一斉に青田がざわめいて広がったんですね。ザー、ザーザーザーっと。そんな時にあの、ああ、ここに本当に命があるんだと。戦後日本の生きている命があるんだと思った。

空襲の記憶ってのは絶望しているのが、青田に逆転するんですよ。それが、その時その句が頭に。いつも何も持たないで帰ってくる時、「大粒の雨降る青田母の故郷」「大粒の雨降る青田母の故郷」って喋りながら帰って來たんですよ。特別……でもって意図するんじゃないくて、発生したっていうか、湧き上がって來たっていうか。そういう意味では自分でもいいんだか、悪いんだかわからないんですよ。ただ口から出てきたっていうことがあるもんで。後から見たらこれいい句だってなって、代表句ということに。20代の初めのこの句が。六十年何やってきたんだって感じ。自分で良さがわからないでやって來たことが後になってわかる感じ。母の故郷なんですね。

それから、20年くらい後にこの町の日本の書家の展覧会がフランスであって、その時これが大賞もらったんです。なんでかという芭蕉の句よりわかるんだって。大粒の雨はどこにでも降っているしね。故郷っていうのは、母国っていうのはど

こでもあるし。雨降る青田はないけれど庭とかあるし。果実園はあるって。芭蕉は「古池や蛙飛び込む水の音」よりはわかりやすいと。そういう風に思ひ出のある自分の出発点の句。戦後の出発、これから生きていかなければまいねという、生きていくとする、あの戦争の絶望からこう蘇ってそこにはその風土の命があるっていうのを感じたっていう。しかもね、あの若い20代の初めの頃の感性に訴えた。そういう意味では自分の代表作だと言える。割合と意外に評判が良いんですね。俳人ばかりでなしに、歌人にも詩人にも非常に広がって来ましてね。ですからこの一句があればいいんでないかな。

次、「病む母」ですね。(引用者注 病む母のひらがなことば露の音)の俳句はいいとすれば……。父は小学校一年でなくなっていますので。母親の手で育った。病気の時もものすごく世話になったわけだハンデ。そんな母ですから特別母に対する思いがあり、母っていうのが自分のテーマなんです。そういうことが実はあります。

「病む母」は間も無く死んでいく母ですよ。喋るの聞いていけばひらかなの、小学校しか出ていませんので、明治20年です。だから十六で嫁にきてひらがなしか知らないということ。喋る言葉にも漢字がないんですよ。露の音がトタンからたち玉が落ちてくるのと、ぷつぷつと喋るひらがな言葉と一緒に感じるという。露という言葉がもう命がなくなってくるという、露の命っていう、それらと全部ダブってくるんです。これは山本健吉日本の詩歌の、明治以来の名作を選んだんですよ。詩も短歌も俳句も。それに入って

るんだよ、これ。ひらかな言葉っていうと露の音が象徴する時代と母っていうのがありますので、なかなか解説難しいですね。俳句っていうのは説明難しいんですよ。以心伝心でわかるしかない。

「八雲たち」の句はですね(引用者注 八雲立ちとどろきわたる佞武多かな)『天門』の中にあります。小泉八雲の「八雲たち……」ってありますよね。本当は八雲はたくさん雲が盛り上がってる、重なる八雲たち。これは青森のねぶた。五所川原の立ちねぶたの方にも使われましたけど。どこのねぶたでもいいんですけど、盛り上がってくる大自然の雲とねぶたが盛り上がっている、轟きわたる八雲たちと照応する。立ち上がってくる八雲と轟きわたるねぶたと、全体が盛り上がってくるそれがねぶたかなと思っっていますね。これも写生というよりはねぶたの雰囲気といいますか、ねぶたとなると血がさわぐんですよ。不思議に。「八雲立ちとどろきわたる佞武多かな」というじゃわめいてくる感じ。八雲とは古語で、これで抑えていたのです。

「鯉ほどの唐黍をもぎ故郷なり」故郷というのは自分の生まれた風土といいますか、そのところが一つ主題になっているんですね。青田もそうですけど。千空俳句の季題が風土にあると見てもいいでしょう。あまり故郷から出はっていないところ。

私、百姓したことがありますので、とうきびをもぐということがね、ここでは「もちきび」ではなくて「まきび」なんだいね。大きいやつ。馬に食わせるやつ。あれ人間食わないです。それが鯉よ

り大きくなるんです。ふつうの「きみ」に比べて大きい。我々が戦後アメリカからもらって来た「キミ」あるでしょう。あれは「まきび」なんですよ。「もちきび」でないやつ。飼料なんですよ、飼料。それを日本人に食わせたんです。あの時は。しかし、それを食って我々命を伸ばしたってこと、繋いで来たってことがあります。鯉ほどのぶくらつと膨らんだよく実ったキミが、なってきたってことなんです。私キミ好きなんです。だから畑につけるんです。どうすればいいキミ取れるかわかっている。鶏のフンが一番。鶏のフンを手でかましているとにくらつとした油浮いてくる。それをキミに与えるという美味しい大きいキミが取れる。

鯉ほどのキミは実感として作った覚えがある、そんなキミ。いい肥料使っていなければ本当の美味しさ出てこないですね。ちょうど中村草田男先生が昭和26年に来た時、まだキミつけていて、実家の方で。草田男先生に食べさせた。食べ方、草田男先生はハーモニカみたいには食べないんですよ。ゆっくりいかに味わっている感じでした。「美味しいですね」と言っていた。「鯉ほどの唐黍をもぎ故郷なり」こういうことですね。

当時、ため池に鯉捕れるじゃないですか。こういうものは物証としてある。物として。頭でなく鯉にしても、とうきびにしても、実感から来ている句。鯉ほどのキビ、美味しいですね。多少オーバーに聞こえるかもしれないけれども、実の世界からきているという感じじゃないのかなあ。

(以下次号)

(県立青森高校教諭・元県近代文学館副室長／青森市)

■私空間■

こ だ ま

成田 千空

こどものころ、私は学校ぎりぎりであった。遊ぶのが何よりも好きで、教科書など読むヒマもなく、遊んでばかりいた。

実際は大正十年（一九二二）四月十日に生まれたのだが、父親は私を一年早く学校へ入れたいたために、三月三十一日生まれといつわって、早生まれの七つで入学させたまではよいが、この子は親の期待に反して、少しも勉強をせず、野や山や海や町の空き地などで、遊び仲間と楽しい時間を過ごすのであった。かけっこ、相撲、水泳ぎ、チャンバラごっこ、写生、セミとり、雪合戦等々、遊びのタネはつきなかった。よく遊びに行った山は三内^{さんない}である。青森の町はずれから半道ほどのなだらかな丘陵地帯で、バッタを追いかけたり、カッコウの声を聞きながら、持参のなべで馬鈴薯^{ばれいしょ}を煮て食べたりした。沢の水がおいしかった。

この山は昔から矢じりなどがよく見つかって、学校で見せびらかすやつがいた。丘が幾重にもつらなつて、森が多いせいとか、こだまがよく聞こえる所でもあった。「オーイ」と呼ぶと、「オーイ」と返ってくる。それが楽しくて、私たちは飽きもせずに「オーイ」「オーイ」と叫ぶのであった。

平成六年に、縄文時代の大遺跡三内丸山が発見されたとき、私はすぐこだまを思い出した。あれは縄文人のこだまのように思われた。

私は俳句をはじめからもう六十年近くになるが、こどものころの遊び好きが、俳句好きに転じたまでのことかもしれない。かえりみてなつかしいと思うものはみな恩だという。野も山も海も人も。（俳人）

■私空間■

太 宰 治

成田 千空

幸か不幸か、私は太平洋戦争中、肺病のために兵役をまぬがれた。ただ当時の肺病は死病であったから、鬱々^{うつうつ}としてたのしめないのである。文芸に関心をもつようになったのも、一種の自己救助であった。

本ばかり読んですごしたが、中でも太宰治の文学に魅せられたのは不思議に心が明るくなるからであった。彼には暗い小説と明るい小説があり、暗い方はいただけなかった。ただ暗い小説にもユーモアを忘れない生得的な人間のよろしさがあった。反骨と道化と神の作家である。風にも傷つく感性からユニークな文章が生まれた。一度読むと忘れない文章が多く、知らないうちにファンになってしまう人が多いのではないかと思う。

私は青森の空襲で焼け出されて、北津軽の母の故郷へ移住したが、太宰治も東京から津軽へ疎開していた時期で、私の所から二里ほどの距離であった。一度、太宰さんに会う決心をして、金木の津島家の門前まで行ったが、余りにも豪壮な家が入りかねた。「このブルジョアめ」とばかり、赤い煉瓦^{れんが}塀^{へい}をたたいて帰った。

彼は再び東京へ戻って活躍したが、半面、生活が荒^{すさ}んだ。彼が死ぬ一週間ほど前に、私は初めて手紙を送った。「どうか死なないで、よい小説を書いて下さい」と。「如是我門^{にょよせがもん}」を読んで、太宰の自殺を予感したのであった。何の返事もないままに、彼はこの世からおさらばしてしまった。私は桜桃忌にもほとんど顔を出していない。

去年、東京の吉祥寺で句会があったとき、友人の案内で三鷹の太宰治の墓にはじめてお参りした。彼が愛用したとんびのような黒い墓であった。（俳人）

■私空間■

俳句会

成田 千空

私が俳句をはじめたのは、昭和十六年、太平洋戦争がはじまった年である。その前年、東京の軍需工場で病気になるって帰郷し、病床でのずから文芸に関心をもつようになった。青森には青森俳句会という超結社の俳句集団があつて、戦争中も活発に句会を続けていた。

同人に学校の教師が多いせいとか、戦地へ駆り出される人が少なく、重苦しい時代にかかわらず、よく冗談をたたき合いながら、自由に句作した。ただ、夜おそくまで会をやっているのも、特高警察に監視されて、幹事が警察に呼び出されたりした。戦争の真ただ中での自由な集会在、本州の北端でひっそりと行われていたのであった。

画家や書家やもの書き連中もいて、俳句論がしばしば芸術論へ発展、若い私などは黙って耳を傾けるばかりであった。

この句会は、昭和二十年七月二十八日の青森空襲の日まで続いた。警戒警報発令中の、わずかな灯の明かりで、顔を寄せ合うようにして句会をやったが、空襲警報のサイレンが鳴って解散した。青森市はたちまち火の海になった。ようやく三内の山に逃げのびたが、夜が明けて焼け野原になった市内に戻ってみると、黒焦げの死体が至るところにころがっていた。戦争を心底から憎んだ。平和への祈りが私の俳句の主題となった。

戦後、青森俳句会から同人誌「暖鳥」が創刊され、若い俳人がたくさん参加して、活気のある句会になった。中でも寺山修司たち高校生の俳人の活躍が目立った。ほとんど戦争で父親を失った世代である。その不幸から文芸の芽が吹き出した。そういう時代の俳句会であった。

(俳人)

■私空間■

俳句と新幹線

成田 千空

私が俳誌「ばんりよく萬緑」の雑誌選を担当してから、もう十年になる。「萬緑」は昭和二十一年に、中村草田男主宰の俳誌として創刊された。草田男は昭和の代表的な俳人である。

降る雪や明治は遠くなりけり

妻はまなす二之夜あらず二之夜の天の川

玫瑰や今も沖には未来あり

等々、俳壇を越えて広く知られている句が多い。昭和五十八年に亡くなったあとも、「萬緑」は継続され、私は四代目の選者である。北津輕に在住したままであるから、東京の編集部から投句稿が送られてくる。草田男先生は自分の句作に没頭されて、しばしば選句が遅れ、編集部に迷惑をかけたと聞いている。

門下の私にそれが許されるはずがない。投句者八百人の四千句を読み通して、選び終わるまでに一週間ほど費やすことになる。虚子は「選も創作」といったが、私はその上に「選は闘いだ」と思う。選に苦勞して時折よい句にめぐり合ったよろこびは格別だ、と草田男先生はよく言っておられたが、全くその通りである。選が遅れると編集部から電話で催促される。まことに小さな日本の文芸だが、投句者も編集者も懸命なのである。

東京の編集会議や句会に参加する時は、特急や新幹線の中で選を続行し、選評まで書くことがよくある。特に新幹線は仕事がはかどる乗り物である。東北の野山は広々として明るく、人もあまり立て込まず、しゃべり合う人も居らない。その上、訪ねてくる客もなく電話もかかってこないのである。それにつけても、盛岡以北の新幹線はいつで

(俳人)

家

成田 千空

辻井さんから「お住い拝見」の希望があつて、写真を送る約束をしてから二年になる。二年もの間約束をほつたらかしているのは借家住いの不安定をものがたる。何ヶ月か後に記事が出たときはすでにぼくの住いでなくなっていることもあり得るのだ。

しかしああした一見おなぐさみの記事を、それと知りつつ苦勞して書いている辻井さんの意図がわかるだけに、このぼくの茅屋をすぐにでも写真にとつて送ろうと思うのだが、写真機を持たぬぼくは人に頼むしか手がないことに思い到つて億劫になり、そのうちに忘れてしまう。

ぼくは戦後早々のすさんだ世情の中で「二宮翁夜話」を読み、あの小父さんの生きざまの真つとうさに参つた覚えがある。あれは孝行主義でもなければ勤儉主義でもない。あえて言えば個性主義ということになる。家を建てるなら土台をまず頑丈に。廂がこれかかったらすぐに手を動かして修理する。農作物は要するに生きものだといふことの徹底した考え方。生きものを生かすには生きものの条件を整えること。その実行と工夫に骨身を惜しまないというだけのことである。そのあた

りまえのことがぼくにはどうしても出来ない。流し場の水揚ポンプのピストンがゆるんで修理の必要をみとめながら、早速には出来ない。納屋の壁がこれかかっているのだがすぐには手が動かない。山の開墾畑は二十度の傾斜をもっており、施肥が雨に流れて偏頗になる。全面を段畑にする労力は僕の青白い手に負えない。汗を垂して育てた作物が思うように豊かに実のつてくれない。だまつて見ていると、何だか自分の生きざまがまぎれもなく其処に示されているようであらくなる。

開墾とは要するに自分の内部の未開地に鋤を入れることだと独り合点して、そういう生活が五年続いた。しかし別に腹の足しにはならなかった。考えてみればぼくは自分の衣食住に深い関心があつたかどうかうたがわしい。衣食住という生きものの条件を明確に自覚しないで一粒の麦を見事に実のらすことが出来るかどうか。

戦争中の大半、ぼくは病気で生家の十二畳間と四畳間を独り占めして暮らしていた。床の間には重さ十貫にあまる赤土色の出土器の甕が据つていた。亡父の残した家である。この家は空襲で焼け落ちた。焼跡に掘立小屋を建てた。田舎の叔父と二人で土をこねくり壁を塗つた。しかし冬になるとどこからともなく吹雪がいくらでも吹き込んだ。やがて兄と弟が帰還してぼくは母の生家に移り開墾生活をはじめることになる。母の生家は百五十年の歳月に堪えて梁も柱も木材というより石のように黒くがっちりしている。むかし、材木庄屋をしていただけに材料にいと目をつけず組み上げたのであろう。手斧削りの荒い痕跡も石そのままの肌ざわりであつた。しかしこれが又戦後の制限

された燈火では家中を万遍なく照らすことが出来ず、薄暗らがりや全くの暗らがり在家中のあちこちに生じ、親類の婆さまなど気味悪がつた。ぼくはその一と間を占有して捉えようのない心の先を追つていた。

——とにかく自分の害から出ようと思ひ立つて町に形ばかりの書店を持ったのは戦後六年目の夏である。様々な階層の人間に直接接したい気持ちが強かつた。借家である。この家が又明治時代の名残りをとどめていて現代の畳建具と取り代えるには寸法が合わなかつた。町に夏祭りが来ると、青いお化けの絵を画いた燈籠を軒の隅に吊したりした。

この家に妻を迎えたときはさすがのぼくも負い目を感じた。それでも雪が降るとあたりの気配がいっきとしてくる。雪は屋根といわず溝板といわず白一色に塗りつぶしてくれるのである。

ぼくは幾度か未来の設計図を引いて妻に示した。その設計図にはギャラリーを備えた採光ゆたかな店舗があり、気の利いた間取りの居室があり、便所に至つてはよく乾燥した最高級の木材を用いていた。それが結婚して七年、何の変わりばえもない。

しかし、ぼくはこのごろしんから自分の手で新しい自分の家を建てたい。生活の条件をがつしり創り出したい。後にも先にも自分の手でつくった住居といえ、あの地吹雪が吹き込む掘立小屋一つ。ということでは残念だ。中野重治がかつて二百年ぐらいびくともしない新しい家を建てたがつた、その真底の意味が、いまのぼくにはわかる。そしてそれがどれほど難しいことであるかということも。

萬緑賞

第一回受賞者 青森 成田 千空

仔馬に叶ふ腋四すみあり春を育つ
懸河一途鵲鴿の尾のきしみとぶ
萌えそめし草ぐるみ騒然馬力試し
堅雪行くや負傷の怖れ身を占めそむ
妻が病む夏俎板に微塵の疵
秒針に見入る病者に夜の霧
西瓜の丸み撫しつゝ来けん友来たる
乳穂のめぐり足形に満てり癒えたまへ
病ひよき妻ゆえ眩し青瓢
銀河一弦足立たぬ友を見舞はん
膝立てゝ臥す友冬の斧の音
何の分別稲掛忙裡口あけて
藁塚幾座厠に気張る声すなり
夏瘦の顔より砂がこぼれたる
溝ありて浮草畜犬も夥し
秋海棠思はぬ会釈老婦より
馬が大事の雪垣ならめ雀群るゝ
寒托鉢戸開かずば去る潔し
防雪林沖のごとくに荒ぶ日ぞ
防雪林吾を待つ母のいまも貧し
笹鳴きや身を傾けて妻を看とる
いで発つや鳴る空車木の芽吹く
大雪や滅びゆくもの芸こまかし
雪帽子馬具屋に忘れ来しと思ふ
大頭大口昼の腑抜け鰯
どびろくに呆けたか玩具に蹴つまづく
壺焼芋屋何か途方に暮れるたる
機械は主軸油光りに揚雲雀

代田青む項根は髪はやはらかく
早苗括りて倦まず一書の来る待つ

接収の報頻りなる岩木山麓にて 五句

青菜種野伏の土の斯く深く
墓の波紋かりそめならぬ砲音ぞも
墓土色根こそぎ松の木が倒れ
並ぶ肥樽雲峰嶺に湧きつゝあり
行方茫洋草穂に牛の毛深き眼

感想

成田 千空

受賞といふことになると戸惑ふ。

この機会に來し方一年の作品に目を通したが、
目を通すことはやはり忍耐を要した。自分の作品
を読み返すとなると、どうして斯うも穏やかで
られないのか。作品をつくるとは、一つの認識行
為に違いないが、その過程を経た結果としての作
品は一個のりん・とした存在であらねばならぬとい
ふ信条が、その通り決して満足に行つてゐないの
で参るのだらう。この次はどうしても、ちゃんと
した作品を産み出さねばならぬと思ふ。

去年から今年に互つて、僕の身辺は不思議なほ
ど悪い事が続いた。このモンスーン地帯の悪気流
め！僕は生活のアン・バランスの中で、とにかく、
めそめそしないことと、生きてゐる証拠を吾
と吾が身に示すために俳句をつくつた筈である。
日常のエモーションは逃がさず、一本一本、杭を
ぶち込む土方仕事をやらかそうと思つた。結果は、
満足な土方仕事も出来なかつたが、それでも無細
工な杭たちのお蔭で、曲りなりにもこの一年を堪

え得た殊は有難い。その意味では、これら無細工
な杭たちと共にこんどの受賞をよろこんでいゝの
ではないかと思ふ。

いふまでもなく作品としては不満が多い。
苦惱から発した作品を帳面に書いて、その苦惱
が帳消しになるなんておかしい。

作品は現実の反映に違ひないが、現実とべた付
きのところから作品は腐るだらう。作品はナマの
現実と次元を異にしたそれなりのリアリティに依
つて存在をつゞけるに違ひない。アン・バランス
の地点——エモーションの性質は、人間内容に関
係があり、じたばたしても始まらぬが、曇りのない
眼で社会を見つめ、おのれを見つめてゆきたい。
これらをひつくるめて鉱物質の明るさを獲得出
来ないものかと思ふ。

経歴

大正十年、青森市に生る。
昭和十四年、上京、航空機会社勤務。十六年病を
得て帰郷。病臥四年、この間俳句を知り、青森俳
句会に拠る。戦後、ひとり山に入り四年間開墾に
従事。傍ら、萬緑創刊と共に投句、今日に至る。
現在書肆経営。

第1回萬緑賞を再録

千空は32歳で、第1回萬緑賞を受賞した。こ
れによって、〈東北に千空あり〉と知られるよ
うになった。受賞が多い千空にとつても、特別
な意味がある賞である。

没後10年にあたり、草田男の選考経過、受賞
作品、感想などを再録した。

『陸奥野辺地社中 芭蕉二百回忌追善供養』顛末記

『千空研究』第10号に館田勝弘さんの翻刻と解説を掲載した『陸奥野辺地社中 芭蕉二百回忌追善興行』（仮称）が、千空資料にあった経緯が判明した。先号の後記「北極星」に記したように、関係者にお返ししたが、後々のために、顛末を記しておきたい。

*

市子夫人から当研究会へ千空資料約1000点
が寄託された。2015年7月1日、五所川原市
元町の千空居に市子夫人、千空生家の甥・故成田
奉生さん、研究会からは西谷ともえさん、齋藤美
穂さん、佐々木達司が集まり、資料を選別した。
研究会の資料として用い、後に青森県近代文学館
に寄贈するとの約束が交わされた。（第3号参照）
後日、資料整理中に和本があるのを発見した。
千空の俳句資料としては異質であることから、千
空の所有ではなく、誰からか拝借した可能性が高
いと判断した。草書体の毛筆書きで判読も困難
だった。

これを解読するのは、郷土作家研究会代表理事
の館田勝弘さんが適任だと、感じた。館田さん
は俳人であり、野辺地俳諧の研究もされている。
お忙しいのに無理を言って引き受けていただいた。
そして第10号に翻刻と解説が掲載できた。
関係者の目に触れば、持ち主を特定しお返し
できるかもしれないと考えたからである。

*

千空日記に、次の記述を見つけた。

○昭和58年8月29日 雨のち曇

前田水馬来。木亘子が置いて行った資料を二人
で読む。明治末年の宗匠俳句。達筆で読みずら
いが当時の地方句会がしのばれる。

○9月9日 曇

朝、木亘子から預った明治の俳句資料ノート。

前田水馬も木亘子も五所川原俳句会の仲間であ
る。水馬は中学校長、木亘子は医師であった。

千空にとっても興味ある資料であったのだろう。
水馬と二人で解読し、10日ばかり後に改めてノー
トを取っている（ノートの所在は不明）。

返そうと思いながら、そのまま忘れてしまった
のだらう。千空の書店兼書斎は資料が山積し、と
きどき資料が行方不明になる。あるのに探せない
のである。県文芸協合理事長だったので、読んで
ほしいと置いてきた資料が見えないと、電話が
あってたびたび届けている。

*

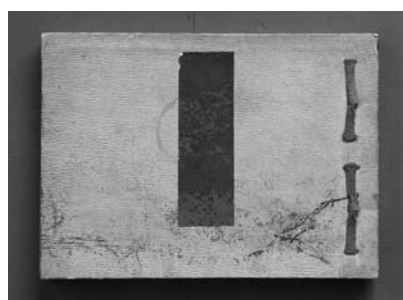
持ち主が判明したので、市子夫人に相談し、お
返しすることとした。

2017年7月24日、増田病院を訪ね、前理事
長の増田尚紀さんにお会いし、事情を説明してお
返しした。父上の増田桓一先生（俳号木亘子）は
医師で俳人だったが、1997年に亡くなられて
いる。

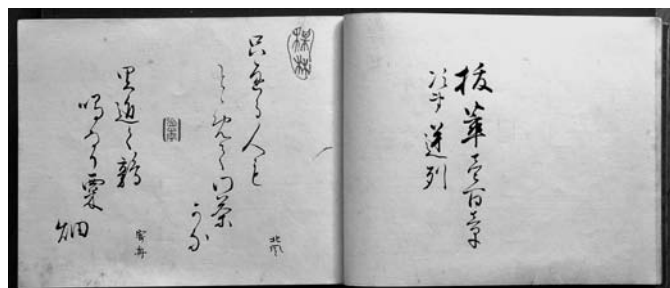
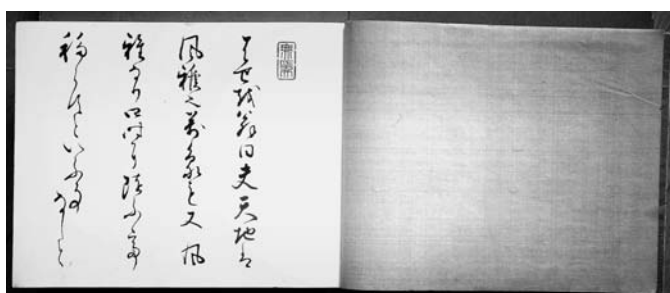
尚紀さんは「父が神田あたりの古書店で入手し
たものだろう。大切に保管する。研究に必要であ
ればいつでも使ってほしい」と、快く受け入れて
くれたことに感謝したい。

なお、影印（表紙および序と本文の冒頭）と体裁
を付しておく。

*



寸法 縦170ミ、横233ミ、
手書き本、横とじ。
製本 平目やまととじ、
中外題（記入なし）、
扉ペラ1丁（記入なし）、
料紙袋とじ51丁。



（佐々木達司）

寄贈感謝

浅利康衛さん（青森市）『まほろば』9・10・11月号
山内ひろ子さん（五所川原市）

『俳句』『俳句研究』『俳句春秋』『東奥日報』『陸奥新報』『デリー東北』『読売新聞』その他の印刷物等、
千空関連コピー、計121点

松宮梗子さん

「五所川原俳句会記録」コピー 昭和59～61年、35点
「五所川原俳句会記録」コピー 平成5～10年、53点
齋藤美穂さん

『俳句研究』昭和17年4月コピー

（雑詠第一部 中村草田男選、千空句掲載）

原稿を募集しています

会報『千空研究』の原稿を募集しています。

1. 調査・研究に関するもの（4000字以内）

2. 回想の成田千空（2000字以内）

締め切り 第13号は1月末、到着順に掲載します。

送り先 （下段発行所、青森文芸出版あて）

*Eメールで送信くださる場合

sasaki@-bungel.co.jp

会員を募集しています

会報『千空研究』継続配布をご希望の方は、会員としてご登録ください。会費は年1000円です。

訂正

本紙第10号、「五所川原俳句会の設立と隆盛」中
『平山五朗句集』（三六年）とあるのは、（四四年）
の誤りでした。お詫びして訂正します。

会員名簿（58名）

〈青森市〉

浅利康衛、齋藤光子、佐藤陽子、
高森ましら、西谷ともえ、野沢省悟、

野村正彦、浜田しげる、未津きみ、

吉田州花

〈弘前市〉

阿保子星、石崎志亥、泉 風信子、
市田由紀子、鎌田義正、後藤 隆、

佐藤 繁、館田勝弘、土田紫翠、

成田圭子、三上弘之

〈藤崎町〉

清水雪江、世良 啓

〈八戸市〉

上條勝芳、小林凡石、仁科源一、
藤田健次

〈十和田市〉

米田省三

〈五所川原市〉

会津明郎、荒閑映子、一戸 鈴、
葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、

齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、
佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、

浜田和幸、松宮梗子、山内ひろ子

〈板柳町〉

木村玲子

〈中泊町〉

外崎文夫

〈つがる市〉

兼平一子、中村雅之

〈深浦町〉

草野力丸、山本こう女

〈岩手県盛岡市〉

瀬川君雄

〈茨城県那珂市〉

永山憲子、寺門資子、矢須恵由

〈茨城県日立市〉

糟谷雅枝、小泉光子

〈千葉県流山市〉

藤埜まさ志

〈大阪市〉

川東郁代

☆北極星☆

○早いもので千空さんが亡くなってから10年になる。時は過ぎても千空俳句は忘れられていない。今年はとくに再評価の年でもあった。「没後10年、おもな出来事」をまとめてみた。

○千空俳句が知られたのは、なんといっても萬緑賞の功だろう。そこで記事を『萬緑』誌から再録した。「作品は一個のりんとした存在でなければならぬ」という千空の志向と、「独自の鋭敏な感応力」と評した草田男の火花を散らす師弟関係から千空俳句が生まれた。○エッセイも興味深い。『読売新聞』のコラム「私空間」を再録した。「こだま」「太宰治」「俳句会」「俳句と新幹線」いずれも自らの俳句人生を描いている。

○『萬緑』から再録した「家」には、「ギャラリーのある店舗」の設計図を描いて妻に示したとある。その5年後に自宅を新築しているが、成田書店は相変わらずの借家だった。しかし、画廊がありサロンのような書店の夢は最後まで持ち続けていたようである。

○評伝『大粒の雨降る青田母のくに』の執筆が進んでいる。来年の今ごろはお目にかけられるだろう。しばらくお待ちいただきたい。

2017年11月17日発行

会報『千空研究』第12号 非売品（会員配布）

発行 俳人 成田千空研究会

佐々木 達 司

〒037-0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版内

TEL 0173-355323
FAX 0173-358414